Rotary International District 2800

山形西ロータリークラブ会報

会長：遠藤　靖彦　　幹事：武田　良和

地区目標　ロータリーにもっと誇りを
そして学び　DEI の心を持って行動実践しよう

クラブテーマ　ロータリーを楽しみ、仲間と絆を！

◆点鐘：遠藤　靖彦 会長　　◆ロータリーソング：奉仕の理想
◆司会：角田浩二郎 S.A.A.　　◆会場：山形グランドホテル

ロータリーのマジック

第3035回例会　　令和６年12月９日(月)

会長あいさつ

遠藤　靖彦 会長

先週、ＪＣにかかわるいろいろな関係の会がありました。昨日は青年会議所のクリスマス家族会というものがありました。青年会議所は昨日の例会が最終例会だということで、あとは12月末で１年間が終了すると。１月から12月という歴年度で活動しておりますので、来年からは新しい会長になるという流れになっております。またそれとは別に、2001年に私、ブロック会長、いわゆる県の会長になりますが、させていただきました。その仲間と久しぶりに飲もうということで、集まって飲ませていただきましたが、その中で今の青年会議所に関する話や昔のＪＣの話になりました。青年会議所の一番会員が多い時で、全国で7万2,000～3,000人、山形県内でも1,000名を超える数で、山形青年会議所も一番多い時で250名の数がいたと。それが今、山形青年会議所で100名前後の人数になっております。会員の人数が少なくて会長をなかなか出せない、それをフォローする体制がなかなかとれないという青年会議所がだいぶ増えているという状況でありました。いろいろな問題が発生しているという話がありました。

昨日の会合の時に、山形ロータリークラブから再来年ガバナーを排出することになったと。そのガバナーの活動に対して、山形ロータリーとして若手がどんどん少なくなっている中で、その体制がなかなかとりにくいと。今後ガバナーを排出するに当たってどういう体制でやっていくのか、そういうことに関して山形ロータリーとしていろんな議論をしているという話もいただきました。組織のあり方、そして体制の取り方というのには、ほんとに今どうするかというよりも先のためにもどうやっていくかということをよく考えながら、いろんな準備をしなくてはならないのかなということをほんとに感じさせられたいろんな出来事があったなと思っております。

山形西ロータリーとして2011年～2012年の時に細谷ガバナーの下で西ロータリーとしていろいろな体制をとらせていただきました。その時地区への出向者が約50名体制でやったんだなと、資料を見させていただいて感じさせていただいたところでありました。山形ロータリーとしても、その体制をとるのが大変厳しいという中で、いろいろな依頼が今後７ロータリーに対して来る可能性があるということを一応ご報告をさせていただいて、本日の会長挨拶とさせていただきたいと思います。

ゲスト卓話

稲作から見る神社の成り立ち

吉福　航一 さん
《歌懸稲荷神社 宮司》

ただいま紹介に預かりました歌懸稲荷神社で宮司を務めております吉福航一と申します。皆さまに神社に少しでも興味を持ってもらえるように、皆さんから見る神社の成り立ちというものを、神社がなぜできて、その土地土地に今あるのかという起源的なところをお話しできればなと思います。

主題にもあるように、かつての稲作はということで、田植えから始まり、稲刈りから始まり、すべて手作業でやったわけですね。ではなぜ日本に稲作というのが必要だったかというところは、それは日本人の大切な食文化であったと。日本人の主食なわけですね、お米ですから。その時代においての稲作に、欠かせない要素というのが3つあります。まず1つ目、土地。田んぼを耕すためにその土地が必要であると。2つ目、川ですね。稲作は水田がなければできない。その水はどこからやってくるのかという話で、当時の日本には水道は通っておりません。なので、すべて川の水を利用して稲作がされていたというわけでございます。それに関係して3つ目、なんだと思われますか。川の水ってどこからやってくるのという話なんですね。それが山だと私は思います。川の源流である山がなければ水は流れてきませんし、土地を耕したところで水田にも水を引くことができない。だから私はこの3つの要素が必要だと思っております。裏を返せば、山がなければ当時の日本で稲作はできなかっただろうと思っております。日本の国土面積の約7割は緑に覆われているわけでございますね。山がなければ稲作はできなかった。それが結果として今の日本の自然に表れているのではないかと私は思っております。

この日本の自然は、誰かに言われて守ってきたのか。誰かが日本の自然を管理しろと言って管理してきたのか。日本の自然というのは誰かに言われて守られてきたわけではないと思っています。なぜならば、稲作と共に生活してきた、すなわち日本は自然と共に生活してきた、そういった日本人のライフスタイルが無意識的に日本の自然を守ってきたんだと思っております。

今の話をまとめますと、1つ、稲作はつまりは日本人が明日を生きていくために欠かせないものであった。それは日本人の主食だから。また、かつての日本というのは、お殿様に献上する納め物としてお殿様に奉納していたわけですね。これも日本人が明日を生きていくために欠かせないものであった。2つ、その稲作の文化を守ってきたことが結果として日本の自然

を守ってきたことにつながってきたんだと思います。土地であり、川であり、山であり、これらがなければ今にも伝わってこなかったのではないかなと思っております。ただ、今回の主題である神社の成り立ちということなので、稲作がどれだけ重要で、その結果日本の自然があるかというのはある程度は想像がついたと思うんですけれども、この2つだけでは神社は成り立たなかったと思っています。

3つ、これに入る前に皆さまに1つの質問を投げかけたいと思うんですけれども、われわれが心の底から祈りを捧げる時、どういう心境だと思いますか。祈りという行動に移す時に、その人はどういう状況で、どういう環境だと思いますでしょうか。絶望の淵に立たされた時、人の力ではどうしようもない時、こういう時にわれわれは祈りを捧げると思うんですね。ではこれを稲作に置き換えた時にどういった状況が当てはまるかというところなんですけれども、稲作にとっての絶望。お米が実らないというのは絶望ですよね。お殿様にかつては献上品として年貢を納めていたわけなんですけれども、その年貢が納められなかった。これもまた絶望なわけでございますよね。明日を生きることができないかもしれないという不安にかつての人たちは駆り立てられたわけなんですね。

では、人の力ではどうしようもない時というのを稲作に置き換えたらどういう状況かということなんですけれども、自然による災害というのは人の力では抗うことはできません。自然災害というのはどうしても付いて回ってきたもので、土砂災害、洪水、津波、地震による山・斜面の崩れなど、人の力では本当にどうしようもない、自然災害というのはこの稲作に置き換えても付いて回ってくると思います。これらから私が言いたいことは、自然というのはわれわれに恵みを与えると同時に、自然に対する畏怖の感情というものも与えてきたわけなんです。ここで「恐怖」ではなくて「畏怖」というふうにしているのは非常に重要でございます。神社を考える上でこの畏怖の感情というのは非常に大切になっております。

神社の神主さんの祝詞を聞いたことがあるという方はいらっしゃるかと思います。どの神社の神主さんも、祝詞の出だしの一文、「かけまくもかしこき〇〇神社の御前にかしこみかしこみももうさる」と。この「かけまくもかしこき」の「かしこき」という文字は、この畏怖の「畏」の字が当てられております。今の一文をわかりやすく直訳いたしますと、「私が言葉に出すことさえ、心に思うことさえ畏れ多いですが、〇〇神社の御神前に宮司何の誰それが謹んで申し上げます」というふうになります。この自然と神というのは本当に道議だと私は考えているんですけれども、この恵みを与えると同時に畏怖の感情も与えてきたということが、そして稲作と神社というのが非常に密接なんだよというふうにお話ししたいわけでございます。

稲作を行うことで、古くから私たちは自然と共に暮らしてきました。すなわちそれは自然災害と共に生きてきたわけでございます。さまざまな絶望、そして困難、そういったものをわれわれのご先祖様、そして先輩方はたくさん味わってきたんだということなんですね。それが祈りを捧げるきっかけになっていったんだということになります。

ではどういった祈りが捧げられてきたかということで、春の田植えの時期になれば五穀豊穣を祈ります。たくさんのお米が実りますようにと。これが祈年祭、春祭りの起源になったわけです。そして秋の収穫の時期にはとれたお米に感謝をいたします。それが新嘗祭、秋祭りの神事の起源になったというわけなんですね。共通して言えるのが、いずれもつらい時期を乗り越え、次はいい時期になるようにという祈りが込められていた、それがいろんな神社さんで行われている神事の起源なんだよということになります。

先ほど空欄にしていました3つ目ですが、自然と共に生活し、自然に対する畏怖の感情が生まれたことで祈りを捧げるようになったんだと。この稲作は生きていくために欠かせないもの、稲作を次の代へ継承して守ってきたことが結果として日本の自然を守ってきた、そして祈りを捧げるようになったと。これら3つがトライアングルの関係となって、たくさんサイクルしてきた結果、祈り、神事のよりどころとして神社という施設は作られたのではないかと私は考えております。

歴史の古い神社さん、築何百年とかするような神社さんというのは、やはり人里離れた水田の近くであったり、山の縁付近であったり、川辺の付近であったり、それこそ山の中腹や山の頂上とかそういったところに鎮座されていると思うんですね。本当に奥底の神社の起源と考えた時に、苦しんでいる方々がいて、必要とされたから神社は建てられたのだと思いますし、その神社を建てようという時に、この土地にはこういった伝承があるから、こういった歴史があるからそこに建てましょうかというふうになったと私は思うんですね。

稲作の不作の時期だとか豊作の時期だとか、そういった時期を幾度も幾度も繰り返し生活していくことで、われわれはあらゆるものへ感謝の気持ちを表すようになったと思っています。その賜物がこの食前感謝の「いただきます」、食後感謝の「ごちそうさまでした」だと私は思います。外国語で「いただきます」「ごちそうさまでした」を直接的に表す言葉はございませんので、本当にこれは日本人特有の精神性だと私は思っています。こういったあらゆるものへの感謝の気持ちというのがいろんな神社さんの神事に直結している。それはすべてこの稲作の文化というのが密接に関わっているんじゃないかと私は思います。

短い時間でしたが、私の話したいことは伝わったかなという感じなんですけれども、これで以上となります。皆さん今日はご清聴ありがとうございました。

幹事報告

武田　良和 幹事

●表彰状が届いております。米山功労者第５回マルチプル、長澤裕二殿。同じく第２回マルチプル、遠藤靖彦殿。おめでとうございます。

●今月のロータリーレートは1ドル150円です。

ニコニコ BOX

〈12月9日〉

遠藤靖彦会長／山形青年会議所クリスマス家族会

昨日、ＪＣのクリスマス家族例会が開催され、山形７ロータリークラブの会長が来賓として参加しました。ＪＣはこれで今年度の例会が最後となります。１年間お疲れ様でした。

細谷伸夫さん／本のひろばに推薦本を展示

恥ずかしながら山形市立図書館主催にて企画された山形駅東西自由通路内本のひろば展示コーナーに、私のお薦め本が展示されております。通りすがりにチラッと見てください。借りることもできそうです。期日は11月29日から12月25日までです。詳しくはパンフレットをご覧ください。

本日出席（12／9）	会員総数	出席会員数
	108名	63名